

ピリポ福音書と経集との思想比較

土屋 好重

A ピリポによるキリスト教思想の概要

キリスト教と言えど誰でもそれは制度的キリスト教であると判断するであろう。そしてカトリックおよびプロテスタントの新旧両派に他ならぬものと考ええる。けれども現存するこのキリスト教はイエスの精神を半分しか伝えていないものであると言えるのである。何となれば、イエスやマリヤム（マグダラのマリヤ）によって提唱されたグノーシス主義のキリスト教は、今日では世界中の何処にも存続していないからである。四世紀末に、テオドシウス帝によってカトリック教がローマ帝国の国教とされたため、グノーシス主義のキリスト教は異端とされてしまったのである。そして異端者が保存して来た文献は尽く焼却され廃棄されるに至ったのである。けれどもグノーシス主義の文献は完全には廃棄され

てはいなかった。何となれば近年になってグノーシス主義のキリスト教関係の古文書が偶然に見つかったためである。すなわち一九四九年にエジプトのナグ・ハマディ近郊で、トマス福音書やピリポ福音書などが奇跡的に発掘されるに至ったのである。これらの福音書が伝える思想は、カトリック派のものとは全然異なるものである。ここにピリポが著者であると言われている、ピリポ福音書の具体的な文章を探究することによって、イエスやマリヤムの系統のキリスト教の教義の概要を先ず研究することにしよう。

ピリポ福音書の原典は、その一部分が既に我が国においても出版されている。完全なものとしてはドイツ語訳が出版されているが、最近では英語訳で更に立派なものが入手出来るようになった。⁽¹⁾ここでは英語訳「ナグ・ハマディ文庫」(一九八一年)中に収録されているアイゼンバークの「The Gospel of Philip」を使用する⁽²⁾⁽³⁾

ことにする。

ピリポは当時行なわれていたグノーシス思想の伝承に従って、宇宙を三つの領域に分けることにしている。それらは現世界 (world) 復活界 (resurrection) および中空界 (middle) と名付けられているが、今日の分り易い用語に直すと、地上界・天上界・地獄界と呼ぶことが出来るであろう。⁽⁴⁾ピリポは現世界あるいは地上界においては二つの対立した諸概念があるということに注意した。それらは光と闇・生命と死滅・右と左・善と悪・喜悅と

地上界 (自然的)			天上界 (超自然的)
地獄界 (逆自然的)	絶対的な闇 (至悪)	相対的な闇 (悪)	相対的な光 (善)
	物質 (外的)	体性 (準外的)	心性 (準内的)
			霊性 (内的)

表 I

苦痛などの対抗概念であるとされる。⁽⁵⁾彼の考え方に従うと、光と闇とは現世においては全く異質的な対立概念とされているが、彼としては両者をどのように絶対的対立と見ることを否定するのである。そこで次のように記している。
 「明と闇は相互に兄弟である。善は善でなく、悪は悪でない。生命は生命でなく、死滅も死滅ではない。それだから、これらのものはその原型的な自然に溶解せられる。けれども

現世界以上に高められたものは溶解されることが無く永遠のものになる。⁽⁶⁾ピリポのグノーシス主義的な思考方式を、分り易く図面化して示すことにすると表Iの如くなるであろう。すなわちピリポのキリスト教神学の基礎は、光と闇の対立の上に樹立されているものなのである。そして光と闇とは共に絶対的のものと相対的なものとに区分されるのである。なお、それらのものは至善・善・悪・至悪の四概念に照応することになる。至善が天上界に属するものであり、至悪が地獄界に属することは言うまでもない。

ピリポの神学的宇宙観は、彼の自分自身の把握の仕方から着想されているものである。彼は当時の常識的な考え方に従って自己を「心」と「体」とに区分する。心が精神または心性であるとき、体が身体あるいは体性であるとされ得るであろう。当時の常識では心が貴いものとされ体が卑しいものであるとされるのである。そこでピリポ福音書も明確に次のように記述している。
 「心は高貴なものである。けれどもこの貴い心が軽蔑すべき体の中に入っている。(ピリポ一三四ページ) 心を上位に置き体を下位に置く考え方が拡大されると、心の更にその上の上位に霊または霊性が考えられるということになる。そして体の下位に物または物質が置かれるということになる。かくて、ピリポの思想の基礎は、霊性(プネウマ)・心性(プシウケ)・体性(ソーマ)・物質の四概念を保持するものとなる。そして心が体の内側である如く、

霊が自己の最も内側のものであるとされ、物が自己の最も外側のものであるとされることになる。今日の現代人の考え方とは異ったもののように見られるかも知れないが、「霊性が最も内側のもので神のものとされ、物質が最も反自然的なあるいは逆自然的な悪魔的なものとされる」という根拠が、ここに宗教思想的に確立されるのである。

B イエスおよびマリyamからの伝承

自分は四つの属性を持っている。霊性・心性・体性ならびに物質がそれである。自己はこの四つの中のどれかの属性に帰依する任務を持っている。自己は知性の援助の下に、現実的に三つの自己の人間形体を持つものになる。すなわち心性や体性を一義的に重んずるものが世間の一般人である。より外側のものに一義的な

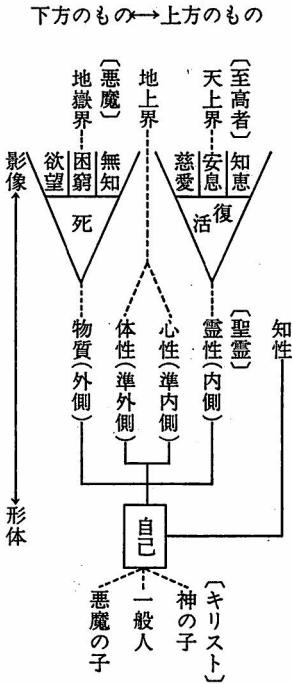


表 II

意義を与える存在が悪魔の子である。そしてより内側のもの、換言すれば霊性を一義的に尊重する人間が神の子である。ナザレのイエスはかりでなく、誰であつても霊性に奉仕して生活するものは、皆すべて神の子であるとされる。ピリポはこのような考え方を次の文章によつて述べている。「真理を得た人は、最早キリスト信者と呼ばれるべきものでなく、キリストそのものである。」(ピリポ一四〇ページ)ピリポ神学においては全く違った奇抜な教義が導入せられている。すなわちキリスト信者そのものに徹すれば、その人は最早、新しい実在としてのキリスト自身となっているのである。ピリポの革新的な非神話的なこのような哲理を分り易く説いているものが表IIである。それによると霊性は聖の字を付けないでも聖なる聖霊とされる。すなわちブネウマがブネウマ・アジオンと記されなくとも聖霊の意味に理解されるのである。

ピリポ福音書においては、油注がれたものは霊性または聖霊を所有したものである。もちろん、人間であれば誰でも霊性の種子は持っていると言えるであろうが、自分が自分の霊性の所有者であることを意識し自覚しなければ霊性を持った存在であるとは言えないのである。福音書のそれに関する文章は次の如く綴られている。「油注がれた者は一切を所有するものになる。油注がれたものは復活を所有する。彼は光をそして聖霊をも所有するものとなる。」(一四四ページ)ま

次のようにも綴られている。『洗礼を受けただけで「私はキリスト教信者になった」と思うのは間違っている。洗礼を受けたらば聖霊も受け取るのだからなければならない。聖霊の所有者となるならば、聖霊の非所有者の如くその利息を支払う必要がないのである。』（一三九ページ）グノーシス主義は自己を知ることを目標とするが、特にピリポのようなブネウマチコ派のキリスト信者にとっては、自己の本来性とも言うべき、自己の聖霊を自覚することが要請されるのである。誰よりも深く自己の本来性を自覚した先輩がナザレのイエスとさるべきは当然のことである。かくてピリポは次のような論理を展開するのである。『ナザレ人は隠されているものを顕現するのである。そこでキリストは自らの中にすべてを蔵している。完全な人も天使も奥義も父も彼の内にいる。』（一三四ページ）ナザレのイエスばかりでなく、すべての人の中に隠されている霊性も、また同様の論理に従って父あるいは至高者を隠しているものであるとせられる。至高者とは、本体論的な実在とさるべきより以前に、万人の最高理想そのものとさるべきものである。ピリポはその最高理想を復活という用語で表現している。復活をその内容から検討することにして見ると、それは安息であると言える。安息を中心とした知恵と慈愛がイエスの理想であるものと判断されるのである。ピリポが如何に安息（アナパウシス）を重視したかは次の語句によっても明瞭であろう。『イエスの安息所に入ることは、どの弟子たちにも必要なことであ

る。』（一四三ページ）

ピリポは、神を天上の実在であると考えたり神の国を未来のものであると考えることを、重視しようとはしない。それらも積極的には否定しないが、それよりもむしろ、彼は神を心の内にあるものと信じ神の国を現世のものであると信ずるのである。このようにないわゆる異端的な考え方は、ピリポによって完成される前に、キリスト教の教祖であるイエス自身によって創案せられたものであると推測される。何となればイエスの語としてマリア福音書が伝える言葉によると、彼は神を「神」と言うよりは、むしろ「善」と言っているからである。本体的な神よりも、価値とし観念としての理想こそが、イエスが一義的に求めた対象なのである。イエスはまた、物質や自然の「内側」または「根底」あるいは「本質」を尊重する。そこで同福音書は次の文章を綴っている。『そのような理由で——自然（フーシス）を自然の「根源」に位置せしめるために——あなた方の「内側」の中に、あるいはあらゆる自然の本質に、善なるものが来られたのである。』（一四七ページ）イエスは奥義とか奥義の奥義とかに關しては、ペテロなど使徒と呼ばれている者に対しても、十分には語らなかつたもののようである。けれどもイエスは、ピリポ福音書に同伴者であると語られている、マリアムに對しては、最奥義までも残さず打ち開かしていたようである。同福音書は、使徒たちを盲目者としマリアムだけを目明きであるとしているかの如く、次のように記している。『光が照れば目明

きは光を見ることが出来る。けれども盲目者は見ることが出来ない。(一三八ページ) マリアムはイエスの奥義に従って、神を善であると考えながらも、善そのものが神であるとした。イエスの肉体が復活したと宣伝するよりも、イエスと言う觀念が今日でも影像(イメージ)として存在しているのであると信仰した。制度的キリスト教の聖書では次のように伝えられている。『イエスは週の初めの日の朝早く、復活して、まずマグダラのマリアに現われた。このマリアは、以前七つの悪魔を追い出してもらった婦人である。』(共同訳聖書マルコスによる福音一六章九節) ペテロを中心とする聖書でありながら、ここではイエスの復活を最初に見たものが、マリアムであることになっている。それは、マリアムのイメージによるイエスの復活の哲理から、ペテロ派の奇跡的な神話が構成されたという足跡を残しているものではあるまいか。次にペテロ派では、七つの悪魔が物理学のあるいは医学的に追い出されたという神話的な伝説を伝えている。けれども「マリア福音書」では、全く精神的に觀念的にしか、七つの悪鬼を扱っていないのである。即ち同福音書では、七つの世界とは七つの中空界の悪魔であって、グノーシス主義的な宇宙観に従って、それらの七つは暗黒・欲望・無知その他の罪惡であると解されているのである。ペテロ派では、グノーシス派の非神話的な考え方を、全くの奇跡として神話化していることになる。

C 福音書と經集の宗教思想の共通点

神仏よりも自我を重視し、来世よりも現世を重視することは仏教においては珍らしい考え方ではない。仏教においてはそのような形而上学的な問題よりも実践の問題が重視されて来た。そのため仏教の原理は三法印とか四法印とかに置かれていた。漢訳増一阿含卷一八によると、四法印とは次の四つの教義から成るものである。即ち「(1)一切諸行無常 (2)一切諸行苦 (3)一切諸行無我 (4)涅槃為永寂」がそれである。最も古い釈迦牟尼の言葉として伝えられている仏教の文献は、一般に我が国で「經集」と呼ばれているスッタニパータである。今ここに初期のキリスト教と初期の仏教との教義を比較するに当たり、後者のテキストとして中村元『ブッダのことは』(スッタニパータ)を使用することとしたい。⁽⁸⁾ 四法印と同様に釈迦の思想の根元を示すものと判断されているものが四聖諦である。『ブッダのことは』は、この四聖諦を説く最も古い形体の詩句を伝えているが、それは次の如きものである。『(1)苦を知り、また(2)苦の生起を知り、また(3)苦のすべて残りなく滅びるところを知り、また(4)苦の止滅に達する彼の道を知った人々——彼等は生と死とを受けることがない。』この短い詩句によっても容易に理解される如く、初期の仏教經典の教義とキリスト教グノーシス主義との間には、極めて大きな類似点が存在するのである。そこでここに簡単に両者の間に見られる宗教

思想の共通点を若干指摘することにする。

イ、ピリポ福音書の筆者は、より内側のものを尊敬する。真に内側のものは靈性であるが、それは聖靈とも呼ばれている。それは自己の自己であり、本来的自己である。グノーシス主義の信仰の究極はこの靈性への帰依であると理解されるであらう。この点、經集すなわちスッタニパータの立場と合致するということになる。何となれば、それは自己を二つに分けて、真実の自我に帰依することを目的とし、偽りの自我を無くそうとするものだからである。スッタニパータには次の語が三〇一詩に詠ぜられている。「自己を洲（よりどころ）として世界を歩み。」（『ブッダのことは』八七ページ）

ロ、ピリポはマリアムの宗教思想を伝承して、「真理」を神的なものであると考えている。そこで次のように述べている。「真理に帰依した人は生命を見出したのである。彼は生けるものとなつたので、死ぬ恐れを持つところの存在になつた。」（ピリポ三二ページ）真理は仏教においては法すなわち仏・法・僧の三宝の一つである。この点ピリポの思想と共通するということになる。

ハ、ピリポ福音書は安息を理想とする。それはマリア福音書に次の如く記されている前例に従っているものであると言えよう。「この時以後は、私は静肅の下における、その時の安息を、その季節の安息を、そしてその時代の安息を獲得することにする。」（10）
仏教の目標が涅槃に置かれていることは周知の処である。涅槃と

は平安の境地であり安らぎの世界である。この点それはグノーシス主義の安息の理想と全く共通するものと言えるのである。

ニ、ピリポの立場は、報酬を目的として善行をその手段として行なうと言うような、打算的なものではない。善を行なうことが心の安息を来らすので善を行なうという考えに立つものだからである。それを具体的に示す文章には次のものがある。「或る人は好く行なつた人たちに慰安を与えることは利益であるとして見ている。けれども善行をなす人は、そのような人たちに慰安を与えようとはしない。善行をなす人は、好く行なつた人たちを慰めることは必要がないと考えているのである。」（ピリポ一四八ページ）これと同じ趣旨で説かれているのが二五七詩であらう。「法の喜びの味を飲みつつある人は、苦悩を離れ、悪を離れている。」（『ブッダ四九ページ』）

D イエスと釈迦の思想の若干の相違点

ピリポ福音書とスッタニパータとの思想の間に見られる共通点を一応研究したので、続いて、両者の間に見られる相違点を簡条書き式に指摘することにしよう。

イ、ピリポはキリスト教信者は、自分が本当にキリストになろうと念願して努力するならば、自分がキリストそのものになるのであると主張する。単にキリストの境地に達し得られるばかりでなく、聖霊を持つことも出来るし、父の神にさえもなれるものと

確信している。それに関しては次の言葉によって明確にされているのである。『あなたが聖霊を見るならば、あなたは聖霊になる。あなたがキリストを見るならば、あなたはキリストになる。あなたが父を見るならば、あなたは父になる。』（ピリポ一三七ページ）

仏教でも自分がブツダになることを理想とすることであろう。けれども少なくとも最初期の仏教では、仏教徒が至高者や父の神になることなどは期待しなかったものであると思う。この点グノーシス主義の立場は頗る徹底したものであると考えられる。

ロ、人間が理想としている境地は大きく三つの段階のものに区分することが出来るであろう。(一)最初の一般的なものは幸福あるいは「さいわい」の境地である。次が(二)平安または「安らぎ」の境地である。そして(三)最後の狭義のものが静穩あるいは「静かさ」の境地である。グノーシス主義の理想もこの三つの領域の全部にわたるべきものである。けれども現実的なピリポの理想は、(一)の幸福に焦点が合わされているだけで、(二)は余り強調するものになっていない。まして(三)の静穩については殆んど触れることがない。これに対してスツタニパータの立場はどうであろうか。それは(二)の平安に自分の焦点を強く合わせるものになる。その結果(一)の幸福が軽視されるということになる。けれども(三)の静穩や静かさは相当に重視するようになるのである。ピリポ福音書は幸福を復活とか永生の概念で把握し、平安を安息とか安息所の用語で解釈することになっている。けれども静穩とか平靜とかに對

しては、仏教ほどには関心を持ち合わさないものである。

ハ、ピリポは心性を体性よりも尊いものであると考える。心性の方が体性よりも内面的なものであり和合的なものと言えるからである。そして体性の方が外面的なものであり闘争的なものだからである。ここにおいてピリポは女性の方が男性よりもより霊的な神的存在であると判断するに至ったようである。かくて次のようにその女性観が展開せられることになる。『この世においては、結合が男である夫と女である妻とによってなされる。すなわち腕力の強いものが柔軟なものによって補完せられるのである。けれども永劫界においては、この結合の形体が違ふものになる。名称は同じく妻であっても、形体を異にするのである。すなわちそれは「強いものよりも強いもの」なのである。』（ピリポ一四五ページ）

仏教においては男の僧侶とともに女の僧尼が認められている。けれども女性の方を優位に置く考え方は持ち合わせないものであると言える。

ニ、グノーシス主義では内側を尊重し外側を排撃する。自分自身の内側は神的なものとされ、自分自身の外側は悪魔とされる。内向的なものも外向的なものも、ともに自分自身の心的現象である。逆自然的な物質現象に対しても、心的現象としての論理が展開し得るのである。そして実体とか實在の仮定なしに、現象世界の理論が樹立できることになる。仏教では実体が「空」であることを強調する。仏教としては我執を排除するための必要性から実

体の否定が重要視されるのである。けれども、グノーシス主義では、「空」の論理に依存することなく、十分にその主張を展開することが出来る。

- (1) 荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』一九八〇年、二七三ページから二九八ページに至る。
 - (2) Walter G. Till; *Das Evangelium nach Philippus*, 1963.
 - (3) James M. Robinson, Director; *The Nag Hammadi Library in English* 1981, pp. 131-151 (Wesley W. Isenberg; *The Gospel of Philip*)
 - (4) *The Gospel of Philip*, p. 140 参照。
 - (5) *The Gospel of Philip*, p. 132 参照。
 - (6) *Ibid.*, p. 132.
 - (7) *The Gospel of Mary (The Nag Hammadi Library in English* 1817, p. 472)
 - (8) 中村元『フタタのことは』(スッタニパータ) 岩波文庫、六〇三—六〇三三、昭和三三年。
 - (9) 『ハムス・ジュン』一三三ページ、七二六詩および七二七詩。
 - (10) *The Gospel of Mary*, p. 473
- (い) や・よし・ひ、経営倫理、愛知学院大学教授